

ルチアめる

2026年 年頭所感

～時代の転換点となる年

外国人への精神科医療提供に向け踏み出す～



社会医療法人聖ルチア会経営幹部

左から人事部長 関根麻紀、理事長・院長 大治太郎、法人事務局局長 高取暢子

- 人からはじまる病院づくり～聖ルチア病院が大切にしていること～
- FOCUS／ゲーム依存(ゲーム障害)
- もっと知りたい 子育てサロンシフォン

2026年
年頭所感

時代の転換点となる年
外国人への精神科医療
提供に向け踏み出す



社会医療法人 聖ルチア会 聖ルチア病院 理事長 院長 大治 太郎

盤石な経営体制で厳しい時代を乗り切る

あけましておめでとうございます。旧年中にお世話になりました皆さま方に、改めて御礼申し上げます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

昨年は政治的にも変革の時期を迎え、今後は社会保障制度が大きく改変されることが予想されます。医療・介護業界にとってはますます厳しい時代が到来しますが、このような状況の中でも患者さまにとってより良い精神科医療を提供し、精神科疾患があっても地域で長く暮らすためのサポートを続けていくために、時代の変化をよく見て、次に求められる役割を追求していく所存です。

当院ではこの数年間、最新の技術を駆使した専門性の高い精神科急性期治療の提供と、精神科分野での地域包括ケアシステムの構築に注力してきました。例えば2007年に54床で新設した精神科急性期治療病棟を、23年には108床まで増床しています。20年に12床でスタートした児童思春期ユニットは、21年に児童思春期病棟とし、

その後も少しずつ増床して現在は47床になっています。精神科急性期と児童思春期疾患の分野は、国の方針としても今後の精神科医療の根幹と考えられており、当院でも継続して注力していきます。

また「精神科にも対応した地域包括ケアシステム」の構築を推進するため、入院期間を短縮し、精神疾患があっても地域で快適に過ごしていただけるよう支援しています。病院での治療に加えて、デイケアなどの社会復帰施設や、訪問看護ステーションなどの在宅支援施設でも、それぞれの疾患や年代に適した専門的な支援を展開し、ご利用者数は年々増加しています。

地域包括ケアシステムで喫緊の課題は、高齢者の増加です。昨年は「2025年問題」とも言われ、団塊の世代が75歳以上の後期高齢者になる年でした。当院でも地域の高齢者医療を支えるため、認知症や精神疾患のある高齢の患者さまを、近隣の高度急性期病院から受け

入れられる体制づくりに取り組んでいます。特に昨年はMRIを導入したことでより鮮明な画像データをもとに、より精度の高い認知症の診断ができるようになり、認知症の新しい薬物療法も提供できる体制を整えました。またこれまでの作業療法を中心とした精神科の専門的なリハビリ提供に加えて、身体機能と嚥下機能の維持向上のために、新たに理学療法士や言語聴覚士の採用準備を進め、高齢者医療に対応できる体制を整えてまいります。

このように、当院ではこれまでも次に求められる役割を先読みすることで、経営的にも盤石な体制を構築するよう努めています。



次に目指すのは 外国人にも精神科医療を 提供できる病院

高齢化とともに、生産年齢人口の減少も進み、今後は外国人労働者の流入が加速的に増えてくると見込んでいます。特にフィリピンやミャンマーなど東南アジアの国々やインドなどの友好国からの流入が増えつつあります。特に福岡県は東南アジア系の方が増える可能性が高い地域です。そこで当院では、次のステップとして、外国人にも精神科医療を提供できる病院づくりに着手し始めました。

精神科医療では、患者さまのことをよく理解し、また患者さまも安心した状態でなければ効果的な治療を提供できません。そのためには言語だけでなく、宗教的な背景や精神性まで理解している必要があります。他の民族が少ない環境で生まれ育った日本人にとっては、宗教観の理解などはどうしても苦手な分野ですので、外国人職員の動員によって、真に患者さまを理解し、日本人の患者さまに提供するのと同等のレベルの精神科医療を外国人の患者さまに提供できることを目指します。

具体的には19年からベトナムより技能実習生を、また20年からはフィリピンよりEPAナース候補者を迎え、日本語教育や、日本の看護師免許取得に向けた支援を開始しています。今年はミャンマーからも介護職の方に来ていただく予定です。日本のルールも理解してもらいながら、日本人と外国人がお互いに理解を深める関係性を築き、多様性の受け入れの土壌をつくりたいです。こうした計画をこれから5年ほどで実現したいと考えており、今年はその大きな第一歩を踏み出す年になる予定です。

AI導入で 効率化と持続可能な 病院経営を目指す

今年もう一点力を入れたいのが、持続可能な病院経営の実現です。人材の確保が難しいなかで、専門職がより専門的で人にしかできない仕事に集中するため、まずはAI導入などにより事務システムの業務効率を飛躍的に伸ばしたいと考えます。またペーパーレス化を進めることで患者さまの利便性を向上し、カーボンニュートラルにも寄与します。

こうした計画を進めつつ、本年も、当院の基本方針である「人権を尊重し、患者様一人ひとりのために、地域の医療機関と連携して求められる医療ニーズに応える」を実現していきたいと考えております。当院に携わる、医療や介護、行政機関や福祉サービスの皆さまには、さらなるご支援・ご指導をお願い申し上げます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。





人からはじまる病院づくり ～聖ルチア病院が大切にしていること～

精神科医療で最も大切な人材教育は、患者さまに
信頼されるための「人づくり」と言えます。人づくり、
組織づくりをどのように実践しているのか、
関根麻紀人事部長に話を聞きました。

組織の拡大に伴い 人事部を立ち上げ

当院はこの10年間で組織が拡大し、10年前は200人弱だった職員が、現在は300人を超えています。そこで昨年「人事部」を新設しました。人事部ができる以前は、看護部長として事務長や法人事務局局長とともに採用や教育に関わっていました。人事戦略の外部研修を受講した際に「これほどの人数の組織が、方向性を揃えて病院経営を続けていくためには、当院にも人事部が必要です」と理事長へ進言したことをきっかけに、人事部を発足し人事部長に就任することとなりました。

人事部ができて1年目は、院外のより多くの方に、精神科について知っていただくことに尽力してきました。例えば各専門職の学生を対象に「オープンホスピタル」を開催したり、医療関係以外の学部からインターンシップを受け入れるなどして、精神科医療に触れる間口を広げています。



聖ルチア病院に受け継がれる 「人づくり」の実践

精神科医療では、職員と患者さまの信頼関係が治療にも大きく関わります。各職員が日々患者さまのために全力をつくし、信頼を得るための「人づくり」「組織づくり」は、人事戦略の中でも最も重要なことです。

当院では、行動方針に「相手の身になって聴こう、相手の身になって語ろう、相手の身になって行動しよう」と掲げており、患者さまに対してはもちろん、職員間でも、心を持って人に接するという精神が脈々と受け継がれてきました。例えば28年前に当院に入職した頃、当時の理事長が自ら、末端の職員である私に声を掛けていただき、体をいたわるように仰っていただいたことをよく覚えています。また看護師として様々な経験をする中で、多くの先輩に親身になって指導していただき、同僚に支えられてきました。

患者さまとの関わりについては、より一層「相手の身になって聴く、語る、行動する」ことが重要です。例えば入職当初は「命を大切に、自分を大切に」と患者さまに一生懸命お伝えしていましたが、患者さまの立場に立つと、考えを押し付けていたとも言えます。そのことに気づいてからは、患者さまが自然とそう感じられる環境を提供するよう努めてきました。病棟で担当したある患者さまが、入院当初は

よく「死にたい」と口にしておられましたが、少しずつ回復され、退院される頃には「もう絶対再入院しないように頑張るよ」とおっしゃっていただきました。その後も外来受診にいらした際にお声かけ頂くこともありました。その方は本当に再入院することなく、自分の人生をしっかりと歩まれました。最期は癌で亡くなられたことを、お子さまからのお電話で知りました。その際に「母がよく会いたがっていました」とお話をいただき、涙が止まりませんでした。

理念や行動方針は、こうした経験と紐づくことで腑に落ち、身についていくものだと思います。そして若い職員や経験の浅い職員が、経験を通じて心得を身につけていくためには、先輩職員や経験豊富な職員が積極的に声をかけ、働きかけながら伝えていく必要があります。私も先輩看護師からよく話していただいていたいました。組織が大きくなった現在は業務量も増え、ゆっくりと自分の経験を次の世代に伝える時間も減っていると感じます。個人的には意識して若手職員に話しかけたりしていますが、もっと組織的に実践できるような仕組みづくりが必要だと感じています。

～理念～

私達は、患者様一人一人のために
信頼される、最良の、
心温まる医療サービスを提供し、
地域の健康と幸福の増進に貢献します。

～行動方針～

- 一、相手の身になって聴こう
- 一、相手の身になって語ろう
- 一、相手の身になって行動しよう

組織が大きくなっても 伝統を受け継いでいくために

当院で長い間受け継がれてきた「人づくり」を将来につないでいくために、組織的に実践するための取り組みを開始しています。

一例を挙げれば、毎月3と9がつく日を「ThankyouDAY」と称して、職員同士で感謝の想いを書いたサンキュー

カードを送り合います。例えば苦手意識がある人に対しても、リスペクトできる部分があると、その人への見方が変わることがあります。ThankyouDAYは、職員同士が意識的にリスペクトできる部分を見つけるきっかけになっています。

また教育研修では、管理者が企画をして、入職3年目の職員を対象とした「心のつながりプロジェクト」を2022年からスタートしました。自分で完結できる業務や役割も増え、先輩からのサポートも減ってくるこの層に対し、悩みや考えを共有できる場をつくるためのプロジェクトです。他職種の同期職員のほか、教育委員や管理者とも関わる場となっています。当院にはこの他にも、入職1年目のフォローアップ研修や、中途採用職員のローテーション研修、管理職研修などがありますので、今後はこうした各研修でも、年次や立場に合わせて「人づくり」の実践を落とし込んでいきたいと考えています。

精神科医療の中心は人です。患者さまに対してはもちろん、職員間でリスペクトし合い、良い関係を築き、気持ちよく働けることは、患者さまへのサービスの質向上にもつながります。組織の成長のためにも、良い伝統を承継し、これからも患者さまに信頼していただける人づくり、病院づくりに尽力していきたいです。



今最も注目の情報にフォーカス!

FOCUS

～増える相談と高まる関心～

WHO(世界保健機関)が2022年に「ゲーム障害(Gaming Disorder)」を正式な病気として認めて以降、「ゲームをやめられない」「昼夜が逆転して学校に行けない」といった相談が増えています。保護者さまからも「どう関われば良いかわからない」という声が多く寄せられています。

監修:柳瀬 美穂子
(児童思春期病棟 師長)

今回のテーマ

ゲーム依存(ゲーム障害) ～“やめる”ではなく、“ととのえる”支援を～



ゲーム依存とは… “遊びすぎ”ではない

ゲーム依存(ゲーム障害)は、単なる「遊びすぎ」ではなく、コントロールが効かず生活に支障をきたす状態です。背景には、孤独や不安、達成感の欠如など、子どもが抱える“こころの問題”が潜んでいることもあります。また、オンラインゲームでは仲間とのつながりや承認を得る場にもなっており、「現実よりも安心できる居場所」と感じる子どもも少なくありません。ゲームは心の逃げ場であり、同時にSOSのサインであることもあります。



子どもの日常を取り戻すために… 「やめさせる」より「ととのえる」

当院でも、こうした課題を抱える子どもたちの入院が増えています。入院当初は昼夜逆転や睡眠不足、食事リズムの乱れがあります。看護師がまず大切にしているのは、ゲームを「やめさせる」ことではなく、生活を「ととのえる」こと。朝日を浴び、決まった時間に食事をとり、人と話す。そんな当たり前の営みを取り戻すことから始めます。

少しずつ笑顔が戻り、会話が増えていく。その変化の積み重ねこそが回復の歩みです。ゲームを制限するのではなく、「安心できる時間」を生活の中に取り戻すこと。その支援を日々重ねています。

子どもと共に気づきを育てる

私たちが向き合っているのは、ゲームそのものではなく、その子の“生活”と“気持ち”。「なぜのめりこんだのか」「何を感じていたのか」……。

対話を通して子どもが自分の気持ちに気づくことを支援します。理解から始まる関わりこそが、子どもたちが再び社会とつながる力を育てます。

保護者ができる第一歩

“やめさせる”より
“理解し、つなげる”ことから始めましょう。

- ① 否定せず、まず聴く
「どんな時にやりたくなるの?」と気持ちを聴くことが信頼の第一歩。
- ② 生活リズムを一緒に整える
朝食や就寝時間を共にし、家庭に“日常”を戻します。
- ③ ルールより安心を優先する
「あなたのことを大切に思っている」と伝えることが支えになります。
- ④ 専門機関に早めに相談する
児童思春期外来やスクールカウンセラーなど、専門家に相談することは回復への第一歩です。

「スマホ依存」での 入院も増えています



ほとんどの児童がスマホの使いすぎが良くないことを理解していますが、スマホ以外の楽しみ方を知らず、時間を持て余してしまうケースも多いです。なぜなら、幼い頃からスマホと付き合い育っているからです。そこで私たちは、入院中の生活の中で、ボードゲームで仲間とにぎわう時間や、仲間と協力して活動する達成感など、スマホ以外での豊かな体験を支援しています。保護者さまも、スマホを少しの時間手放して、顔を見て話す時間を増やすことができると、家庭での時間が楽しい家族の時間になると思います。



もっと知りたい



子育てサロン シフォン

子育てサロン『シフォン』とは

聖ルチア病院では、療育支援事業の一環として子育てサロンを行っています。当院の患者さまでなくても、子育て中の保護者さまはどなたでも参加していただけます。

当院の子育てサロンの特徴は、「同じような悩みを持つ保護者同士の“つながり”ができる」「精神科医療の専門職に気軽に相談できる」ように環境を整えているところです。ほっと一息つける茶話会で、保護者さま同士お話ししたり、当院の専門職がご参加者のニーズに合わせたテーマで情報提供しています。

たとえば…

発達

発達障害等の診断の有無にかかわらず、お子さまの発達に不安がある方にもご参加いただいています。保護者さま同士で、学校や地域の支援について情報交換などもされています。声の掛け方や関わり方について、心理士などの専門職に相談することもでき、ご希望があれば個別の療育相談や、当院での受診相談に繋げることもできます。

不登校

不登校の原因を紐解くと、お子さまの特性や発達に関することがある場合もあります。また家に引きこもることでゲーム依存などの次の問題につながることもあります。不登校に関して専門職からは「生活リズムを整えること」をよくアドバイスしています。無理なく少しずつ状況を良くしていく方法を、一緒に探していきましょう。

ゲーム・スマホ・インターネット依存

ゲームやスマホ使用に関して、ご家庭で決めたルールを守れず親子げんかに発展する、親子関係が険悪化するなどのお悩みも増えています。お子さまが納得できる声のかけ方やルールの決め方など、情報交換の中でヒントを得ていただけたらと思います。

～参加者の声～

自分ひとりだと良くない方向に考えてしまうので話をすることで安心できました

いろんな保護者の方の話を聞けて参考になりました

専門職のスタッフにしっかり聞いてもらえたので安心して話すことができました

1～3月のテーマ ～語り合おう、不登校のこと～

【毎月第3土曜日開催】 時間:各13:00～14:30

1月17日(土) ● 見過ごされがちな子どものSOSと、日常の関わり(仮)

2月21日(土) ● 発達特性から見えてくる「困りごと」と「強み」(仮)

3月21日(土) ● 子どもが自分のペースで歩める環境を考える(仮)

子どもたちに関わる専門職と一緒に、不登校について語り合います。

【参加費無料】要・事前申込

お問い合わせ 0942-33-1581
(担当:武下・池田)

※小学1年生～高校3年生までのお子さまを持つ保護者さまを対象としています。



看護師
廣松 愛

臨床心理士
公認心理師
武下 和史

臨床心理士
公認心理師
町田 七海



グループホームは、障害者総合支援法に基づき精神障害のある方が自立した生活を目指すための共同生活援助施設です。日中は仕事やデイケアなどに通いながら利用される方が多く、10代から70代まで、幅広い年代や疾患の方にご利用いただいています。

職員であるサービス管理責任者や世話人がご利用者の生活を見守っており、体調が悪いときや、不安や心配事があるときは、個々に相談に応じていますので安心して生活することができます。



精神疾患や障害について経験の深いスタッフ4人が、朝早くから夜遅くまでご利用者をサポートする



個室でプライバシーを守りつつ共有スペースで共同生活の練習もできる「シェアタイプ」と、完全に個室で過ごせる「アパートタイプ」がある

グループホーム(共同生活援助)ルピナス TEL.070-4761-1531

- グループホームルピナスⅠ・Ⅱ(アパートタイプ)
福岡県久留米市本町7丁目194番地
- グループホームルピナスⅢ(シェアタイプ)
福岡県久留米市梅満町994番地6-2階

ご利用者がひとり暮らしや家族との同居など次のステップに進むために、金銭管理や、家事のやり方、仕事と家事の両立のコツなど、生活のために必要なスキルを身に着けるサポートをします。

グループホームの職員は、ご利用者一人ひとりの計画に合わせて、最長でも2年以内に次のステップに進めるように支援します。最近では3カ月スパンで経過を振り返り、半年から1年の短期間で次のステップに進まれる方も増えました。日頃から他法人のグループホームや介護施設、一般のアパートなどについて情報収集し、ご利用者が暮らすのに最適な環境を提案できるようにしています。

連携先の皆さまへのメッセージ

ご利用者に関わる皆さま方との連携を深め、情報共有しやすい体制をつくることで、より良い支援をスムーズに提供したいと考えております。

相談支援事業所や作業所の皆さまなど、すでにお世話になっている施設さまとの関係を大切にしながら、今後はさらに多くの方に、当グループホームのことを知っていただきたいです。

グループホームルピナス 管理者
(法人事務局局長)
高取 暢子



聖ルチア病院では、ご家族がひとりで抱え込まず、安心して気持ちを語り合える場を大切にしています。

定期的に行っている家族支援をご案内します

問合せ先：聖ルチア病院 tel.0942-33-1581

各会の詳細については、お気軽にお問い合わせください。

当院患者さまのご家族向け

アドニスのか

(統合失調症の患者さまのご家族)

毎月 第2土曜日 開催

～受診の有無を問わず参加できます～

シロタエギクのか

(依存症の患者さまのご家族)

毎月 第1土曜日 開催

子育てサロン「シフォン」

(小学校1年生～高校3年生のお子さまをもつ保護者さま)

毎月 第3土曜日 開催



社会医療法人 聖ルチア会
聖ルチア病院
St. Lucia's Hospital

〒830-0047 福岡県久留米市津福本町1012

TEL0942-33-1581(代表)

FAX 0942-33-1586

関連施設

- ・精神科デイケア、デイナイトケア、ショートケア
- ・重度認知症患者デイケア すずらん
- ・訪問看護ステーション クローバー
- ・訪問看護ステーション クローバー おおき
- ・グループホーム ルピナスⅠ・Ⅱ・Ⅲ

